

はじめに

令和5年簡易生命表によると、日本の平均寿命は男性が81.09年、女性は87.14年であり、世界一の長寿となっている。従来65歳以上を高齢者としてさまざまな施策を講じてきたが、年々伸長している平均寿命の状況等から、近年高齢者の定義の見直しが検討されている。健康寿命との差異等に照らして75歳以上が妥当であるといった考え方も提起されているが、高齢者は身体面や精神面だけではなく社会面にも配慮することが必要であることから、今後の議論の余地を残している。

人口における高齢者の占める割合は、高齢者人口の増加だけではなく少子化の影響も受けて高くなってきている。これまで無料あるいは安価で利用可能であった生活を支えるサービスの利用に伴う自己負担が時代の変遷とともに増加してきており、公的年金を主たる収入源とする高齢者の経済基盤を圧迫しつつある。また、人口の都市集中化やそれに伴う核家族化の進行により、独居や老々介護、そして8050問題、介護殺人・介護心中などさまざまな社会問題が生じてきている。このような状況を鑑みるならば、高齢者は身体的にも精神的にも、そして社会的にも脆弱な状態にあるといえる。

以上のことをふまえると、社会福祉における高齢者福祉とは、高齢者の身体的・精神的・社会的側面に視点を置き、今までの人生がいかに意味のあるものであったかを実感できるような余生を送ることができるよう、また生きがい感をもって住み慣れた地域での生活が可能となるようにするための学問であるといえる。日本を創ってきた先輩・先人であるという意識をもつことが大事である。そのためには高齢者に対する敬う心が前提にあり、その体现として高齢者福祉があるというロジックである。

社会福祉士の養成課程では、高齢者福祉の目標として次の事項が掲げられている。

- ① 高齢者の定義と特性を踏まえ、高齢者とその家族の生活とこれを取り巻く社会環境について理解する
- ② 高齢者福祉の歴史と高齢者観の変遷、制度の発展過程について理解する
- ③ 高齢者に対する法制度と支援の仕組みについて理解する
- ④ 高齢期における生活課題を踏まえて、社会福祉士としての適切な支援のあり方を理解する

これらの目標から考えると、社会福祉士として高齢者支援に携わるためには、高齢者福祉の歴史や高齢者の心身の状況、法制度の理解が求められているといえる。しかしながら、専門職としての社会福祉士にはこれらの理解に留まらず、更新されるさまざまなデータや情報から高齢者が置かれている状況を再分析し、現状に対応した施策等になっているか否かを逐次考察していただきたい。とくに高齢者の現状は、刻々と変化している。常に高齢者の目線から現象を観ることを忘れず、法制度の限界や課題を読み取り、最善の生活とは何かを念頭

に支援を検討することが重要なのである。

先に述べた独居や老々介護，そして8050問題，介護殺人・介護心中などの社会問題は，「制度の狭間」にあって高齢者を取り巻く問題は，今後ますます複雑化していくと考えられる。そのなかで既存の法制度が十分に対応できない（できていない）現象もあるかもしれないが，そのような状況であっても社会福祉士には惜しめない不断の支援が期待されていることを強く認識してほしい。

2025年1月

編著者代表 竹本与志人・杉山 京